

特定非営利活動法人（国税庁認定）
柔道教育ソリダリティー

第9回講演会

「日独交流150周年」

文化交流で未来を拓く」

ハラルド・ゲーリック

（ドイツ大使館）

一等参事官・文化部長

2010年12月6日（月）

於：東海大学校友会館

「イスラエル・パレスチナ

訪問報告」

理事長 山下泰裕

年末のお忙しいところを多くの会
員の方々にご参集いただき、ありが
とうございます。

今年の6月に開催した第8回講
演会で、私どもの法人の4年間にわ
たる活動を振り返りました。先日、
その折の話をまとめた小冊子が出来
上がってまいりました。皆さまのお
手に配布させていただきましたので、ご覧下さい。

さて、本日は冒頭に10分ほどお時
間をいただき、7月17日から23日
まで、私と光本事務局長、井上康生
の3名でイスラエル・パレスチナを
訪問させていただいた時の報告をし
たいと思います。この訪問は、イス
ラエル公使を務められている松田邦
紀さんのご尽力により実現したもの
です。松田さんは、イスラエル公使
着任前に外務省でロシア課長を務め
られており、私が外務省と協力して
日露交流を進めていた時から親交が
ありました。その松田さんがイスラ
エルに赴任されると決まった時から
ぜひ私にイスラエル・パレスチナを
訪れて柔道を通じた交流を進めてく

れないか、と何度もお話をいただい
ていたのです。

松田さんのおっしゃるところに
よれば、日本はイスラエルともパレ
スチナとも良好な関係を持っている。
それにもかかわらず、政治家の方々
を含め、どうも我々日本の政府は中
東和平に関してできることが限られ
ない、とのことでした。

そこで、柔道の「和の心」をもつ
てスポーツ交流を実現してくれない
か、ということでした。

そのうちに在イスラエル大使館
の竹内晴久大使からも依頼書をいた
だき、我々NPOにできることがあ
れば、ぜひ協力したいと思うようにな
りました。

この企画には、国際協力基金にも
乗っていただきました。「山下さん、
是非やりましょう。我々の指導者派
遣事業として進めましょう」という
ことになり、訪問が実現したのです。

イスラエルとパレスチナ

双方の子らが同じ畳の上に

現地ではまず、イスラエルのナシ
ヨナルチームを率いている指導者の
方々を対象に講演会と柔道教室を行

いました。外国で往々にして求めら
れるのは、技術面に関する指導です。
それに対して、我々が伝えたいのは
「柔道の心」、即ち「柔の心」「和の
心」であり、それをお伝えしながら
日本を理解してもらいたいというの
が我々の想いです。ですから、だい
たいどこの国に行きましても、この
両方を伝えるために講演会と柔道教
室をセットに行っているのです。

イスラエルでは、スポーツ青少年
大臣ともお会いすることができ、今
回の訪問の意義などについてお話し
ました。

その後、パレスチナに入りました。
この写真で、我々の奥に写っている
のが「壁」です。



私も実際に訪問するまでは勉強
不足で、自治区内は自由に行き来で
きるものと思っていました。ところ

がパレスチナ自治区の中にある都市や村の周りは全部塙で囲まれており、相互の移動もままなりません。そんなパレスチナ自治区においても、講演会と柔道教室を開催したわけです。最終日にはメイン行事として、イスラエルの子どもとパレスチナの子どもを集めて合同の柔道教室を開きました。合わせて50名くらいの子どもたちが参加してくれました。

パレスチナ側はエルサレム地区に住んでいる子どもたちで、他の地域に住んでいる子どもたちは来ようと思っても、残念ながらなかなか移動がままならないということでした。イスラエルと比べるとパレスチナのほうははるかに貧しく、柔道着も上着しか持っていない子どもがたくさんいました。ここでも30分ほど「柔の心」についてお話し、その後井上康生と二人で実技指導をしました。今回の訪問に関しては、NHKも大きく取り上げて下さいました。取材当日、NHKから「稽古しているところを背景に取材したい」と申し出がありました、稽古をバックに私がインタビュウを受けたわけですから、終わりましたら「山下さん、できればイスラエルとパレ

スチナの子どもと一緒に組んでいる場面があればありがたいですよね」と言われたのです。それに対して修行が足りない私は、いささかムツとしまして、「そんなわがままを言うものではないですよ。同じ畳の上でイスラエルとパレスチナ両方の子どもたちが立っている。それだって大変なことではないですか！ そんな、わがままは言うものでないですよ」と申しました。それで取材の方は「そうですね、すみませんでした」と。

ところが、私が振り返って道場に入ったら、すでにイスラエルの子どもとパレスチナの子どもと一緒に組み合っていたのです。終わった後、パレスチナの子どもが「これまでイスラエルの子どもと会ったこともなければ交流したこともないけれど、こうして組み合ってみると同じ人間だな、と思った。これからもいろいろな場面でこのような企画を持つことは大変意義あることだと思う」と言っていました。

我々がほんの少しだけ試みた行事だったわけですが、よくそれを理解していただけたな、と思った次第です。

柔道を介して進む

イスラエル・パレスチナの交流

実は今回、もう一つ大きな目的がありました。12月26日福岡グローバルアリーナで開催される第8回サニックス旗福岡国際中学生柔道大会に、両方の中学生を招聘しようという目的があったのです。イスラエルのスポーツ青少年大臣にお会いしましたし、パレスチナでは自治政府のサラーム・ファイヤード首相ともお会いし、どちらにもこの提案をしました。双方から「そういう場に我々の子どもたちが参加できるのは素晴らしいことだ」とご賛同いただき、目下、準備に入っています。

予定では、イスラエルの子どもたちは12月17日に日本に入り、パレスチナの子どもたちは18日に入国します。イスラエルでは金曜日が休日にあたるので移動ができないということから、1日早く入るようにしたわけです。

日曜日には双方の子どもたちがそろい、東京・武蔵野市の望星学塾で武蔵野市の子どもたちと一緒に稽古し、翌月曜日には講道館での合同練習も企画しています。

滞在中の動きに関して、当法人の

理事である加藤暁子さんから「せっかく日本に来るのだから、広島にも寄ったらよいのではないか」とご提案いただきました。そこで早速、先方に問い合わせたところ、双方とも「ぜひ広島を訪ねたい」とのことでしたので、22日に東京を離れて福岡に移動するのですが、早朝の飛行機でまず広島に行き、原爆資料館見学や秋葉市長の表敬訪問をする予定です。その後、子どもたちはバスで福岡に入り、イスラエルの子どもたちは28日、パレスチナの子どもたちは29日に帰国する予定です。

この企画に関しましては、12月20日に外国人記者クラブでも発表させて頂いていただきます。その際にもできればイスラエル・パレスチナ双方の団長に同席してほしいとの話がありました。が、なかなか微妙な問題もあり、私としましては若干腰が引けている状況でした。それで「早速、現地にお問い合わせよう」ということにしたところ、イスラエルもパレスチナも喜んで外国人記者クラブでの記者会見に出席しようとのこと。ですから、当日は私と両団長とで記者会見に応じることになっています。

このような活動を展開できるの

も、このNPO法人の活動に日ごろからご理解をいただいている会員の皆さまのご支援とお力添えがあればこそと思っております。これまでご支援いただいた皆さまに心から感謝申し上げます。

私も、これからも日本ならびに海外の青少年育成に対して、スポーツを通じた国際交流による平和活動貢献を続けていきたいと考えています。今後も、なお一層のご理解とご支援をお願いいたします。

これで私からの報告を終わりにいたします。

一 理事長、ありがとうございます。続きまして、本法人副理事長の橋本敏明より、今回の講演の前振りとして少し話をさせていただきましたと思います。よろしく申し上げます。

ドイツと日本柔道交流について

副理事長 橋本敏明

「柔道教育ソリダリティー」の講演会にお越しいただき、ありがとうございます。

本日の講演会は、今年が日本とドイツが交流を開始して150周年という記念の年に当たることから、ド

イツ大使館一等参事官で文化部長のハラルド・ゲリックさんをお迎えし、ドイツと日本の文化交流をテーマにお話いただくこととなりました。

先日、ハラルドさんと打ち合わせをさせていただいた折に、講演の前半として私からドイツと日本の柔道について最初に触れさせていただきました。とお話いたしました。従いまして、現在、文化交流の中でドイツ

と日本はいろいろな意味で柔道の分野で交流をしています。私からはドイツに柔道が伝わった「事始め」といいますか、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎師範自ら種を撒かれた交流の経緯について、少し資料を調べたことなど折り込みながらご紹介したいと思います。

嘉納治五郎師範が拓いた

日本とドイツの柔道交流

1861年1月24日、当時のプロイセンと我が国の間に修好・通商・航海条約が結ばれ、交流が始まりました。嘉納師範は、1889年（明治22年）から翌年にかけて、30歳

の時にドイツに留学されています。当時はドイツ帝国と日本との関係は非常に良好で、多くの日本人青年が

留学していました。ドイツの憲法に強い影響を受けて日本の明治憲法が制定されたということはよく知られているところです。例えば有名な小説家の森鴎外は軍医候補生として留学しており、1884年から88年にかけてベルリンで医学を学んでいます。嘉納師範は、鴎外が帰国してすぐにドイツに行かれたことになりました。

嘉納師範が留学されました時、おそらく直接柔道の指導をされたのではないかと思えます。このことについていくつかの資料に基づいてお話ししましょう。

石黒敬七さんの「欧州における柔道」というレポートが講道館発行の『柔道』（昭和8年7月号）に掲載されています。石黒さんは大正13年にフランスに渡り、パリを中心に活動されたということです。文中に石

黒さんは「欧州に正式に柔道が伝えられたのは、なんといつても嘉納師範の第1回目ヨーロッパ訪問の明治22年9月のことであろう」と記述しています。

そこではまた、日本からたくさん留学生が来るので、ドイツの人々は彼らから柔道や柔術の話聞きなが

ら自らドイツ式柔道を作り上げていっているという指摘をしています。実際にドイツスタイルの柔道というのは、その後、嘉納師範がドイツに行かれたときにもあったそうです。

1933年（昭和8年）には、嘉納師範は小谷澄之当時6段や鷹崎正見らを同道してシベリア経由でヨーロッパに行かれています。モスクワを経由し、6月15日にベルリン到着

この時は、ドイツ、フランス、イギリス、スペインといった国々を回り、柔道の普及とともに世界柔道連盟を作る下打ち合わせをされています。また、日本にオリンピックを招致する活動などに奔走されました。

鷹崎さんが同じく雑誌『柔道』に「随伴録」という紀行文を残しています。それによると、嘉納師範がベルリンに行かれた目的は、柔道を普及し正しい柔道に対する理解を深めてもらふこと、そして「聞くところによるドイツ式柔道を見てみたいという目的もあった」とのことです。鷹崎さんの随想の中には、当時ドイツ式柔道は全ドイツに広がって、400〜500のクラブがあったと報告しています。

また、嘉納師範は当時のドイツ政

府の要人であったヒットラー首相らに会い、日本の教育事情について意見交換をしたと記録されています。体育大学や警察学校、陸軍体育学校なども視察し、柔道に関する講演をされたとのことです。何しろ日本語で講演し、ドイツ語でも英語でも説明されたとのことで、その場所に応じて卓越した語学を駆使して説明されたと記録が残っています。

ベルリン滞在は約1ヶ月でしたが、その間に1日2時間ずつ2回に分けて講習を10日間やりました。鷹崎さんのレポートによれば講習生はたいへん真剣だったそうで、「素晴らしいドイツ人の気質を見た」と書いています。シュツツトガルトで開催された全ドイツ体育祭も見学され、そのときにヒットラーが大衆を前に有名な演説をしたわけですが、嘉納師範はそのすぐ近くにいたわけです。また、ミュンヘンでも講習会をやらせています。

同行した小谷澄之先生が「嘉納先生のお供でヨーロッパへ」という随想を書かれて、これがベースボールマガジン社から1984年に『柔道一路』という本として一冊にまとめられました。小谷先生はドイツ留学

中、後に参議院議員になられた北畠教真さんという当時5段の留学生に案内していただいたとのこと。その時に嘉納先生は、自分が30歳のときに留学していた当時のドイツと、昭和8年当時おそらく72〜73歳くらいになられて再訪した時のドイツの有様がずいぶん違うと説明を下さったそうです。嘉納先生ご自身、あまりの変化に驚いていらつしやったとのことでした。

小谷先生も「ドイツの青年は非常に熱心で、意気天を衝くようだ。何しろ我々のベルリン滞在中に柔道の技の全部を教えてくれと言われてびっくりした」とのことです。当時の警察関係で柔道着はまだ昔の柔術のスタイルで、短パンで肘のところまでしか上着がないものでした。それでもともと柔術を作ったのはドイツであり、それが日本に伝わって発展したのだから元祖は我々だ、との説明を受けて「これはもうびつくりした」と書かれています。それでも嘉納師範はドイツ人の話をニコニコ聞きながら、柔道の原理をドイツの人たちに説明していらつしやったとのこと。小谷先生も必ず書いておられる

のは、「稽古が終わった後にビアホールに行つて飲んだビールが美味かった」とのこと。「これは忘れられない」と書いておられますが、これはもう時代を超えて同じ印象を持つのではないかと思えます。

柔道の精神を世界に広めるために

1933年、私どものNPO法人を立ち上げる大きな思想的な基となつている東海大学の創設者・松前重義先生がドイツに留学しています。松前先生の自伝から調べましたところ、先生は1933年4月1日に日本を発ち、翌年6月1日に帰国されています。6月上旬にベルリンに到着し、同じく北畠さんの通つている道場で練習をしたと書いています。これは丸山三造さんが編纂された『世界柔道史』の冒頭にも書かれています。嘉納先生が来られた時の講習会でお手伝いもされたとのこと。嘉納先生はドイツ語で柔道の奥義を説明され、松前先生が研究で留学されていたジーマンスという会社にも来られたとも書いてあります。

最後に松前先生は、「柔道が東京オリピックの競技に加えられ、世界の柔道にまで発展した由縁のものは、

このような創始者・嘉納先生の努力に負うものである」と感想を述べられています。

後に、ご存知のように松前重義先生はご高齢にもかかわらず国際柔道連盟の会長に候補されたわけですが、私が推測するに、松前先生はお若い頃に見た、条件の厳しい時代にドイツまで来られて熱心に柔道の説明をされる嘉納先生の姿が、どこか心の中に残っていたのではないのでしょうか。

嘉納師範は帰国後、講道館の雑誌に「講道館の柔道、今日の柔道の目的とするところは、単に肉体的の練習にとまらずして柔道の根本原理の解説とその原理の社会生活万般のことに応用するところにある。技術方面のことにのみ留意して、精神方面のことを忘れてはいる者が決して少なくない。精神的な社会の中でその原理を生かしてくれ、これが自分のこれからの仕事であり、講道館はその目的のためにこれからますます活動していかなくてはならない」と書かれています。これは、社会の中で柔道の精神を広めてほしい、応用してほしい、という創立者の切なる願いではないかと思えます。

そう考えますと、私たちのNPO

法人は、それに沿ってさきやかながら活動を継続させていただけるのではないかと思っています。どうか皆さま方と一緒に、創設者・嘉納治五郎師範が柔道の目的とされたことに向かい、共に活動ができればと思っております。

本日はこれから、そういった意味で大変縁のあるドイツと日本の関係についてお話を承ります。大変楽しみです。どうぞ、よろしくお願います。

一 それではあらためてご紹介します。本日のゲストスピーカー、ハラルド・ゲーリックさんです。拍手をもってお迎え下さい。

ハラルドさんは駐日ドイツ大使館一等参事官で文化部長を務められ、日独文化交流に大変ご尽力されておられます。

それでは、どうぞよろしくお願います。通訳は、同じくドイツ大使館の佐々木さんをお願いいたします。

日独交流150周年

文化交流で未来を拓く

ハラルド・ゲーリック

(ドイツ大使館一等参事官文化部長)

みなさん、こんばんは。ドイツ大使館のゲーリックと申します。皆さんの前で話できることは大変光栄です。後ほど講演はドイツ語で話して佐々木さんに通訳してもらいますが、少し下手な日本語でお話したいと思えます。

今、パレスチナとイスラエルとの交流を仲立ちした経緯を聞き、皆さんが果たされている役割を大変素晴らしいと思えました。それこそがスポーツの本当の意義だと思えます。勉強になりました。

ドイツでも柔道が盛んです。一方でドイツはサッカーの国ですから、パレスチナとイスラエルの間でサッカーを仲立ちとした交流もやってほしいと感じました。

政治・経済交流の先駆けとなる

文化・科学交流の始まり

さて、私はドイツ南部の人口1万人ほどの小さな町で生まれました。フェンシングが盛んで、ドイツ・オ

リンピック・スポーツ連盟会長で国際オリンピック委員会副会長のトーマス・バッハ氏もこの町の出身です。本日は日本とドイツの関係をお話するわけですが、私は文化に関する担当者ですから、主に文化と科学にまつわる話をしたいと思います。ここからはドイツ語で続けましょう。

日独の文化と科学の関係は、常に政治と経済の関係に先駆けるものでした。これは今日に至るまで我々両国の関係に大きな影響を与えており、他の多くの国々との関係と異なるところでもあり、さらには互いに対する深い尊敬の源ともなっています。

日独における文化・科学関係の交流は、1861年の修好・通商・航海条約の協定による公式な国交樹立より、はるかにさかのぼる古いものです。相互に相手国を知るようになったそもその始まりは、17世紀のこと。当時、オランダの東インド会社に在籍していたドイツ人医師たちが日本で自然科学や動物行動学の調査を行い、ドイツと欧州に日本への関心を巻き起こしました。その関心は長く続き、エンゲルベルト・ケンペルの研究視察をまとめた書物は、啓蒙主義の時代に日本のイメージを

決定づけ、医師のフィリップ・フラントツ・フォン・シーボルトは、19世紀に普及した近代日本学に多大な影響を与えました。

ドイツでヴィルヘルム・フォン・フンボルトによる教育改革が進展していた明治時代、日本では多数のドイツ人が顧問や教育者として活躍しました。代表的なのは、プロイセンの憲法を手本に明治憲法の作成に参画した法律学者のアルバート・モツセヤ、ヘルマン・ロエスラー、近代日本医学の父とされている医師のユリウス・スクリバやエルヴィン・フオン・ベルツ、また日本の地質学の父であるハインリッヒ・エドムント・ナウマン、さらには東京大学で教鞭を執った歴史学者のルートヴィッヒ・リースや、鉱物学者のクルト・アドルフ・ネッターらが挙げられます。

20世紀に入り

ますます深まる学術交流

1974年には科学とテクノロジの分野での政府間協力協定が締結され、1985年にベルリン日独センター、1988年にはドイツ日本研究所が開設されました。また、

日本はアジアにおけるドイツの大学の大切なパートナーであり、大学間協力協定の締結数は常に増加して現在、約300に上ります。こうした協定では、学生や研究者のモビリティから共同留学プログラム、共同研究プログラムに至るまでの全ての分野が対象になっています。

ドイツ学術交流会(DAAD)は、日本で博士課程や修士課程を対象とする留学や大学でのサマーコース、語学研修、さらには留学生の再留学までの奨学金を提供しています。また、東京大学では2000年にドイツ学術交流会によりドイツヨーロッパ研究センターが開設され、ドイツ関連の研究や講演の拠点となっています。

日本の大学には現在、約250名のドイツ人講師が教鞭を執っており、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団とドイツ学術交流会の奨学生OBが4000人以上います。このように、日本の学生にとってドイツは魅力的な留学先となっています。ドイツに留学した日本人学生の統計を見ますと、1990年以降その数は1200人から1500人へと恒常的に増加しています。ドイツは日

本の大学生が好む留学先の第4位になっています。

大学以外にも研究所同士で多数のプロジェクトや協力協定があり、大学間の協力関係を補完しています。その例として、ドイツ側ではフラウンホーファー研究機構、マックス・プランク協会、ヘルムホルツ協会、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツ協会が挙げられます。これらを支援しているのが、ドイツ学術交流協会やアレクサンダー・フォン・フンボルト財団といった学生研究者の定期交流、さらには日本学術振興会の協力でドイツ研究振興協会が助成しているプログラムです。

昨年は在日ドイツ商工会議所を中心に、ドイツ・イノベーション・アワードが日本で初めて設立されました。この賞は、ドイツの自然科学者で東京工業大学創設者であるゴットフリート・ワグナーにちなんで正確には「ゴットフリート・ワグナー賞」と名づけられており、環境、エネルギー、健康・医療、安心・安全の各分野で活躍する日本人自然科学研究者に授与されます。賞金は900万円でドイツ企業12社が出資しており、これには2ヶ月に及ぶド

イツ滞在が含まれ、この部分はドイツ学術交流会が奨学金として授与しています。

さらに補足しますと、ドイツ政府は25年以上前からフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞を設け、各分野でドイツとの交流に功績のあった日本の若手自然科学者や人文学者を対象に授与しています。賞金額は5万ユーロで、これはドイツが外国の学者に授与している中でも最高額を誇ります。賞はドイツの大統領から授与されます。

このような例でお分かりになりますように、日独の間では文化や科学の分野で多様な交流がなされています。

双方の努力が可能にする

文化・科学面の継続的な交流

さて、1999年から2000年にかけて、「ドイツにおける日本年」が開催されました。また、2005年から2006年にかけては「日本におけるドイツ年」が開催されました。

両交流年に関しては、現在開催中である日独交流150周年と同様、両国の科学関係が重要分野の一つに

なっています。

両国の文化科学関係はこのように広範なものが、それに甘んじることなく、常に相手国への関心を維持・進化し続けることが肝心です。こうした日独関係の礎を世代を超えてつなげていくためには、日独双方の努力が常に必要となります。

この点での大きな警告であると私が受け止めているのは、日本人の若者のドイツ語への関心が明らかに低下していることです。いくつか理由があるでしょう。まず、日本の多くの大学では、何年か前から第二外国語科目が必修ではなくなりました。一方で、当然のことではありますが、日本の若者のアジアなど近隣諸国の言語と文化への関心が増大していることです。

さらに世界的な傾向でもあるアメリカを手本とする圧倒的なイメージと、止めどない英語への浸透が、日独の若者がドイツの文化や言語への関心を持つ上で妨げとなっています。これらは、過去と同様に活発で密接でな日独関係の維持を目指すのであれば、私どもにとって極めて重要な課題です。

東海大学がこうした課題を以前

から意識し、対策に着手しておられることは存じています。これを端的に示すものが、冒頭の理事長のご挨拶と副理事長のご挨拶にありましたような貴大学の多様な活動だと思えます。

この活動に関する皆さまのご尽力を讃えますとともに、今後もこのように多様な活動を継続していただきたく、お願い申し上げます。

私どもドイツ政府といたしましても、若者の関心の低下には対策をとっています。先ほども申し上げましたとおり、ドイツ大統領は毎年、人文科学と自然科学の若手研究者にフリリップ・フランツ・フォン・シールボルト賞を授与しています。さらに、ドイツ文化センターによるドイツ語普及活動、ドイツ学術交流会によるドイツ人教師と日本人ゲルマニストに対する支援とアドバイスのネットワークなどがあり、さらにドイツ文化センターからは最高の翻訳に授与される「レッシング・ドイツ連邦共和国翻訳賞」とドイツ文学の日本語訳で最も優れた作品に贈られる「マックス・ダウテンダイ・フェーダー賞」が毎年授与されています。またドイツ大使館とドイツ文化

センターは密接に協力して、パートナー校イニシアチブを通じてドイツ語の推進を進めています。今では日本の学校でドイツ語学習者の4分の1がこのイニシアチブによる助成を受けています。

さてここで少し、私が今思い出したことをお話しさせて下さい。1964年の東京オリンピックは私もまだ10代でしたが、自宅のテレビで日本の柔道の活躍を見ていました。その当時は大部分のテレビが白黒で、東京オリンピックの頃からカラーになったと記憶しています。カラーテレビで東京オリンピックを見るために私は親戚の家に行きました。そこで初めて「日本」という国を知ったわけです。これが後に私を日本に導く動機となったわけです。

少子化による国力減退には

教育力の充実で対処する

さて、私の個人的な話はこれくらいにして、講演を続けましょう。

ドイツでは目下、喫緊の課題が教育です。将来の人口推移を考えると、約6年後から学生数が足りなくなり、専門技術者の不足への状態に突入することが予測されています。10年後

には学生数が100万人近く減り、その影響が顕著に見られるようになるのが若手エンジニアと自然科学者の分野です。

悲観的な見方をする人々は、ドイツのイノベーション拠点としての地位が著しく低下し、大変な労力を払って勝ち得た競争上の利点を部分的に失うであろうと予測しています。そうなると、「メイド・イン・ジャーマニー」はもはやブランドではなくなってしまう。

ただ、私個人としてはそれほど悲観的な見方をしていません。ドイツは日本と同様、非常に豊富なアイデアを持つ国です。自国の経済やそれぞれの地域、世界のイノベーションに強いインパクトを与え続け、優れた研究拠点となっています。近年、テオドール・ヘンシュ、ペーター・グリュンベルク、ハラルド・ツア・ハウゼンなど、ドイツ人のノーベル賞受賞者が再び増加していることが、如実に物語っています。日本でも小林誠氏や野依良治氏をはじめ、今世紀に入っただけで10人のノーベル賞受賞者が出ています。すでに皆さまご存知の通り、今年度のノーベル賞はアメリカ人のリチャード・フレ

ッド・ヘック氏と共に日本人の根岸英一氏、鈴木章氏がクロスカプリング技術で受賞されることが発表されました。

ただ一つだけ明らかなことは、グローバル化された世界にあつてこの高い質を維持するためには、大変な努力が必要だということです。政治においても教育の重要性は認識されています。現在の金融危機は世界的に国の予算に大きな打撃を与えています、そのような中にあつても、ドイツの研究・教育・イノベーション予算は大幅に増加しています。今年の教育研究関連予算は120億ユーロが追加拠出されました。これは、

教育と科学が我が国において占める大きな意義を考慮したきわめて重要なシグナルです。これはおそらく、この二分野が我が国の将来を形成する礎となることとも関連することと関連していると思います。教育・研究・イノベーションは、金融危機を長期的に克服する上でも基本となるものです。

教育・研究の公的および民間の投資額は、現在2150億ユーロに上っており、これによって「ドイツ総生産額の10分の1を教育・研究開発

に投資する」という最近の自己目標に近づいています。この点では、国と民間が手を携えて協力しているのです。このように、我が国のイノベーションと進歩と将来性は、官民双方の共通目標なのです。

グローバル化の重要性が増大するとともに、教育の国際化に予算増額の多くが投入されています。ドイツ外務省の予算の4分の1に当たる約7億2000万ユーロが対外的な文化教育政策に充当され、そのうちの3分の2以上が教育分野の国際協力に当てられています。教育分野でのドイツとの協力関係に対する諸外国の関心も、大幅に増加しました。これは、学校教育や職業教育、そして大学教育など、教育全ての分野に及んでいます。

これはおそらく、ドイツの大学の競争力を大きく強化した改革である「エクセレンス・イニシアチブ」のおかげでもあります。この取り組みは政府与党協定で教育の協力関係を特に重要視したもので、協定では「我々はドイツを教育分野での輸出大国とし、その事業化を重点的に促進する」とうたっています。

現在では、これまで以上に国内向

けのみの教育産業は存在しなくなっています。研究教育拠点としてドイツで活用され適用されるノウハウは、世界のどこでも通用します。従いまして、教育研究開発における国境を越えた協力はいつそう我々の活動の中心となつていきます。

我々は次の世代を国際基準で教育し、外国人留学生や科学者を惹き付けています。中国1国を例にとつても、現在約2万7000人の学生がドイツに留学しています。ドイツはこうした外国人留学生に「教育」という資源を提供し、またこの資源を価値としています。ドイツの大学を卒業した外国人留学生のうち、約3分の1が教育研究拠点としてのドイツの良好な基本条件があるがゆえにドイツに留まり、科学者・専門家としてドイツのイノベーションや成長に貢献しています。我々はこの現状を維持するか、さらに発展させたかと考えています。そのために、今後学術分野の国際協力を拡大する努力を強化し、行政上の障壁を低くしようと考えています。

大学の自治確立と国際化は

日独共通の緊急課題

日本とドイツの大学は、似通った課題に直面しています。ドイツの大学にとりましては、直近の未来の中心的課題の一つが、「ポロニーヤ対策」の進展とその改善です。多くの国で確立された国家に対する大学の自治を、より確かなものにしていかなくてはなりません。大学はまた、国際化をカリキュラムや研究プログラムのコンセプトのみならず、大学全体のプロセスとして認識していかなくてはなりません。これは日本の大学にも該当します。日本でも国立大学の自治が大幅に強化されましたが、ここでは新たなマネージメントと質の確保の体制が必要になります。

ドイツと同様、日本の大学においても、現在はグローバル化の大きな圧力にさらされており、それによって国際化が促進されています。日本では全体の70パーセントの学生の教育を担うのが、私立大学となっています。これはドイツとの大きな違いです。

ドイツのみならず日本においても大学の国際化は大きく促進されましたが、その結果、実際に学術協力

の大きな可能性が生まれています。大学が教育と研究の分野で積極的にグローバル化のプロセスをもたらす課題に取り組みなければならぬことは、ドイツでも日本でも共に認識されているところです。これから必然的に国際化が強化されることになります。

同時にモビリティと資格の認定に関しては、日独の間に今なお障壁が存在しています。今日では科学の分野でこれまで以上に透明性と国際協力への比重が増大しているため、世界的なネットワークが構築されています。これはアイデアの競争の最大の切り札となるものと考えています。そして、日本とドイツはすでに長年にわたり、こうしたネットワークを築いているのです。

この日独のネットワークを端的に示すものが、日本科学イノベーション・フォーラムです。これは日独の長年にわたる実り多い協力関係を礎として構築されたものであり、日独双方の共有財産の宝を掘り起こすことを目標とするものです。この宝こそ、私の講演のタイトルである「教育研究を通じた未来の宝」ということにつながるものです。

日独がともに開催する日独交流150周年記念事業を通じて、私どもは未来を見据え、若者を主要なターゲットとする所存です。日独両国政府は、この記念事業を1年にわたって開催することで合意しました。当記念事業のドイツ側名誉総裁は、ドイツの大統領であり、日本側名誉総裁には皇太子殿下にご就任いただくという同意を得ています。

日本においては、10月16日に私ども大使館主導のもと、東京・多摩のドイツ学園で150周年のオープニング行事が開催され、8000人もの方が参加しました。また2011年には、「ドイツ・ロック・フェスティバル」や、横浜・大榎橋での大規模な式典など大きな行事が開催される予定です。ドイツ文化センターや経済界、市民団体も多数の行事を開催します。

こうした記念行事に、特に学生の皆さまの積極的なご参加を希望いたします。ご清聴、ありがとうございます。

質疑応答

一 どうもありがとうございます。志を持った多くの日本人がドイツに

渡り、学術文化交流を始めて150年経った今、ドイツが教育や科学技術に対してハイレベルな政策を行っていることを今日のハラルドさんのお話を通じて学ばせていただきました。もう一度、大きな拍手をどうぞ。さて、質問はありますか？

一 大変興味深い講演をありがとうございます。私は山口と申します。二つほど質問させていただきます。

教育において大学が非常に国際化されているというお話を伺いました。ベルリンの壁が崩壊したのは1989年でしたが、それ以降も経済的格差あるいは技術的レベルでドイツにおける東西冷戦の影響が10年以上残っていたと聞いております。大学教育においても東西冷戦の影響として教育的格差のようなものは残っていたのでしょうか。

もう一つは、移民の問題です。リマンショック以降、ヨーロッパにおいても不況が続いていると思いますが、特にドイツの東側における低所得者層の間では、トルコ系移民に対する人種的偏見が鬱積しているとも漏れ聞いています。これはドイツの国際化に反する動きだと思います

が、移民政策に対する偏見は根強くあるのでしょうか。

以上、とりとめもない思いつきの質問ではありますが、よろしくお願ひします。



非常に良い質問をいただき、ありがとうございます。最初の質問からお答えしたいと思います。格差に関しては、確かに全てなくなつたとは申し上げられないと思います。ただ、格差をなくすために非常に多くの努力がなされました。

例えば東西統一後、ドイツ国内では東から西へ、西から東へと多くの人々が動きまわりました。大学に関しても旧東ドイツ圏から大変質の良い学生が西側の大学に來ています。こうした互いの交流を通じて東西の格差はかなり低くなつたと考えています。

今では多くの学生が、旧東ドイツ圏にあつたライプツィヒやドレスデン、ベルリンなどで学ぶことを非常に好んでいます。ベルリンにはフンボルト大学とベルリン自由大学という二つの大きな大学もありますし、技術系の大学も多数あります。このように学生の一般的な好みという点では、旧東ドイツ圏の大学で学ぶ

ことを好む学生が多いと感じています。

大学の分野によつても若干の違いがありますが、理数系の分野に関しては旧西ドイツ圏の大学のほうが質が高いといえると思います。例えばカールスルーエやアーデン工大大学などは、非常に名の知れた技術分野の大学です。経済関係の分野に関しても、西側のほうが若干有利だという傾向があります。ここで日独の大学交流の例を一つ申し上げますと、非常に優れたプログラムの一つになつているのが、東京大学とハレ・ヴィッテンベルク大学という旧東ドイツ圏の小さい大学との間の交流プログラムです。

二つ目の質問も、大変良い質問だと思います。たしかに国際化と移民に対する偏見とは、大きな矛盾があります。多くの市民は、経済が低調になるにしたがつて移民に対して脅威を感じていることも事実です。この解決に向けて私たちは多くのことをしなければなりません。一方、経済が好調に進展すればこうした問題は少なくなるわけですが、その点、私どもの努力が求められているわけですが、重要なのは経済次第だという

ことです。経済の発展が良好であれば、外国人排斥という非常に暴力的なことは少なくなっていくと思っております。

補足説明させていただきますと、現在、ドイツ国内において生粋のドイツ人以外の市民は800万人います。これは日本の状況と比較すればかなり高い数字だと思います。

1960年代、移民をめぐる環境は現在とはだいぶ違いました。イタリアやスペインから多くの外国人労働者が、むしろ歓迎されてドイツに入ってきました。この人々がドイツ国内で増えるということ、ドイツ人は脅威と考えていませんでした。外国人政策で失敗したのは、質の低い外国人労働者を受け入れてしまったことです。質に見合った労働者を迎え入れるということが、非常に重要なことだと思っております。

一 ありがとうございます。時間も迫っておりますが、最後に一つだけハラルドさんに伺いたいと思います。今のお話では、日独交流150周年の記念行事として、日本でもドイツの文化や技術、学术交流などを紹介する機会が大変多く持たれると

のことでした。逆にドイツでは日本の文化などを紹介するイベントとしてどのようなものが行われているのでしょうか。



また良い質問をいただき、ありがとうございます。日独交流150周年に関しては役割分担をして進めています。日本での行事にしましては、私も在京のドイツ大使館が担っています。ドイツにおける行事に関してはベルリンの日本大使館が責任者になっています。

非常に多くの事業が計画されていますが、多くは古典的な日本を伝えるものです。具体的には、能や狂言など、伝統的な日本の文化を紹介する計画があります。スポーツではマラソンなども計画され、毎年、デュッセルドルフで開かれる「日本ウィーク」を、150周年にあたって規模を拡大して行う予定です。

とにかく様々な行事が企画されており、さらには詳細をご覧になりたい方は、ぜひベルリンの日本大使館または在京ドイツ大使館のホームページをご覧下さい。全ての行事を紹介しています。

ここで日本における催しを補足

させていただきますとして、すでに三菱1号館を会場に開催されている「カンディンスキー展」を紹介させていただきます。カンディンスキー自身はドイツ人ではありませんが、

ドイツに長年住んでおり、非常に素晴らしい作品を制作しました。カンディンスキーは「青騎士」と呼ばれるドイツ独特の芸術家グループを形成していました。ぜひご覧下さい。

音楽の分野では、ドレスデン・フィルハーモニーの日本公演が開催されます。さらに、2011年1月8日からは、陶器のマイセン展が開催されます。300点以上の作品展示により、マイセンの300年にわたる歴史のエポックを全て網羅している展覧会になっています。マイセン自体が芸術作品として長い伝統を持ちますが、一方でマイセンは日独の交流史を語る存在でもあります。マイセンの陶器が、日本の有田を模範にして作られたものだからです。

一 ありがとうございます。本日の講演会も、日独交流150周年記念行事として、ドイツ大使館からご後援いただき開催させていただきました。本日は大変お忙しい中、私ども

のためにおいでいただき本当にありがとうございます。最後に皆さま、もう一度拍手でお送りください。それでは、これで閉会させていただきます。皆さま、お忙しい中をご参集下さいまして、ありがとうございます。

◆在日ドイツ大使館 ホームページ

<http://www.tokyo.diplo.de/Vertretung/tokyo/ja/Startseite.html>

◆在ドイツ日本大使館 日独交流 150 周年 ホームページ

<http://www.de.emb-japan.go.jp/dj2011/kontakt.html>